



編集長(ダン シロウ)

■ 学会員200人ほどのちいさな組織ながら、『学会誌』、『対人援助学マガジン』、年次大会、定例研修会と、いろんな事が小さく継続実施できている。

会員のスタンスも様々だが、継続というところで連携できているからこそその事態なのだろう。会員拡大にあまり積極的ではないのも、大きくなるのが良いことだとは思っていないからかもしれない。(基本的に入会希望は大歓迎です。事務局にお知らせ下さい。)

「学会誌」もこの「マガジン」も、会員以外の人たちにも無料で読んでいただけるスタイルをとっている。

学会員であることの特権はこれらに執筆する権利と学会で発表する権利くらいである。ならば書く気や発表する気のない人は学会員にならなくてもいい。学会費を払うメリットがないじゃないかとおっしゃればそうかも知れない。

しかし、そこが対人援助学の理念、「融合と連携」を考えたときには違っている。

学会員になると、対人援助学会の維持継続や、更には対人援助学フィールドの継続発展に、ささやかながらも経済的貢献をしていることになる。

利用者や消費者ではなく、参加者、構成員になってこの世の中とコンタクトできる事になる。そのエントリー料が学会費である。

私達は今、安いほど良い、タダならもっと良いという世界ではなく、意味あることに賛同の一票としてお札を出す習慣を持たなければならない。

誰かがやってくれるだろうと思っている内に、崩れて消えてしまう世界にしないために、維持構成員として出費を引き受けなければならない。これが良きお金の使い方というものだろう。

編集員(チバ アキオ)

支援において、「プロセス」が大事なのか？「結果」が大事なのか？こんな問いが頭をよぎる。

ソーシャルワークでは、プロセスが重要と言われてきた。困っている現状から、支援の実施に至る段階で、すでに困っていたところから、次に進んでいる。それが一歩である。その上で本人が納得をして、思いを実現していくことが大切にされる。先日の対人援助学会の大会でも「プロセスが目的である」という言葉で話題になった。

支援で「結果」を出す。対人援助では結果がわかりにくい。そこへの批判も常にあった。結果を問われないこともあった。「現状維持」もあるのがよくあるとされている。「付き合うのが仕事」「いっしょに歩むのが仕事」「伴走」という言い方もよくある。

突然、組み合わせてみる。(←なんで?)

プロセスがよくて結果が悪い。これは良くあることかもしれない。しかし、結果がでないと…というのも事実である。

逆に、結果は出ているけれどもプロセスがよくない。これはパターンリズムに代表される。主体が誰か？将来に依存を引き起こすかもしれないし、自分たちのことを自分たちのこととして扱える自信を奪っているかもしれない。

(あえていう必要があるんかといわれると困るけれども、)あえていうなら、結果が出ることが重要な～と脳裏によぎる。結果が良ければプロセスは置いておくということもある。これはシステム論に近い。プロセスにこだわりすぎることの結果が伴わないこともよくある。

プロセスが目的であり、結果を出すことも目的である。場面によっては二律背反することもあるように思う。

対人援助学マガジンの「プロセス」は何だろう？書く、共著者と場と時間を共有する、社会にエントリーする、原稿が蓄積されていく。

「結果」は何だろう？たまった原稿がある。連載から広がった活動もよく聞く。

とにかく、何もしなければ始まらない。動くことがプロセスとなり、そして結果がでる。

よいプロセスには結果が伴うことも多いし、よい結果にはよいプロセスがあることも多い。このぐらいの理解がちょうどいいのではないかと考えてみた。

(結果というよりも 成果と言った方が整理できたかも…とかいううちに初冬の夜は更けていく…)

編集員(オオタニタカシ)

遅ればせながら宮崎駿監督作品の「風立ちぬ」を観ました。才能と夢を持ち、努力を惜しまず、成功を得た人であっても、必ずしもハッピーエンドという結果を得られるわけではない。結果は思うようになるものではない、できるのは自分の持ち場で力を尽くすことだけ。そんな言葉が何度も頭に浮かびました。

「老後を考えると貯蓄はこれくらいはしておかないと…」とかいう話に胡散臭さを感じてしまうのは、結果から逆算しようとしているからなのだろうなど、改めて気がつきました。しかし、たとえ逆算をしても、結果は確実に保障されるわけではなく、希望しない結末を迎えた時、人はそのプロセスをどのように振り返るのだろう、と思いました。

このマガジンは、そんな結果からの逆算とは無縁です。今、この人が書くことで意味が生まれる、そんな原稿ばかりです。これらの原稿が何年後かにどんな意味や影響力を持つかはわかりませんが、それぞれの持ち場に力を尽くしていることを形にしたものがこの「対人援助学マガジン」なのだと思えます。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

第十六号は2014年3月15日

発刊の予定です。

原稿締切2014年2月25日!

新規連載者を募っています。
編集部まで執筆企画をお知らせ下さい。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランブラス二条御幸町402
仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻15号

第四巻 第三号

2013年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FA

対人援助学会事務担当

X:075-465-8364

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

表紙のイラストは季刊「発達」(ミネルヴァ書房)に長期間連載していた頃、その一回の挿絵として描いたものです。その後、文春新書「家族力×相談力」の扉としても使用したことがあります。

思春期の女の子の考えていることや成長が、男である私には実感的に分かりません。母娘間の葛藤などまいちピンときません。この年頃の少女の鋭い感受性は、私には謎です。